シンポジウム C

震災の子どもたちを支える
――今なにが起きていて何が求められているのか

座長：内田伸子（お茶の水女子大学 名誉教授）

総括

シンポジウムＣでは３人の話題提供者を招いた。大坂純氏（仙台白百合女子大学人間学部教授）は、被災地の人々、子どもの暮らしから奪われたモノやコトが何かを、臨場感あふれる写真と語りで参会者に訴えた。また一方で、被災者が互いに思いやり、支え合おうとする文化が東北には生きていることを実感させられたと言い、「その智恵と文化を理解し、大切に思って支援することこそが被災者支援のあり方だ」とのメッセージは説得力があった。

吉田穂波氏（ハーバード公衆衛生大学院リサーチフェロー）は、日本では乳幼児と妊産婦のケアを担う災害支援システムが存在していないことから、家庭医、産婦人科医、助産師の力を合わせ、震災直後から石巻市・東松島市で行ってきているボランティア活動を報告した。この経験について、被災者や被災状況の写真を提示しながら、今後も「子どもや母親の傷をいやすことは、ほかのことよりも優先されていいことである」「地域復興は、若い人たちが子どもを生み、新しい家族を作りたくなるような土地作りから」と、被災地の母親や子どもが大切にされるよう支えていきたいと訴えた。

佐々木丈二氏（宮城県石巻市立湊小学校校長）は、勤務する学校が校舎１階の天井まで津波により被災。学校に避難した児童・幼稚園児・地域住民たちは３日間外部との連絡途絶に耐え、教職員は避難者の世話と学校外に避難した児童の確認作業に追われた。今回の地震・津波の恐ろしさと、その中にあってもなお、希望を失わず、明日に希望を託して力強く生きようとする人々の姿を紹介された。また、この震災から学んだこととして、第一に安全な学校・機能を失わない学校づくりであり、第二に、児童を支える教職員を支えることが必要であることを訴え、市の教育委員会や校長会でも今後の対応を考えていきたいと提案を締めくくった。

３名の話題提供者の臨場感あふれる提案を受けて、神戸震災から復興した経験をもつ八木俊介氏（あしながが育英会あしながレインボーハウス・チーフディレクター）と中溝茂雄氏（神戸市教育委員会事務局指導課長）の指定討論を皮切りに、フロアとの討論が展開された。話題提供者のバランス、指定討論者の的確な討論により、会場全体が、今度の地震・津波の自然災害と、原発事故という文明災害の恐ろしさを共有するとともに、力強く生きようとする人々への敬意を深く感じるところとなった。

子どもたちはけなげに耐えている。が、自然災害と文明災害が重なった今回の災害の子どもたちへの影響は深刻である。身長や体重の発達速度曲線 (velocity curve) は、平成 23 年 10 月の発達速度は平成 22 年 10 月の４分の１である。「外で遊べない」「大人たちを見ていてわがままは言えない」という被災下でのストレスは子どもの身長や体重の伸びを止まらせたのだ。

また、東京や埼玉へ家族から離れて一人で疎開した中高生の中に、疎開した直後は緊張から熱心に通学したが、３カ月もすると不登校になる子どもが増えている。これは学習の進度が問題ではない。コミュニケーションスタイルや対人関係の持ち方の違いから、友だちができず不登校になっているのである。シンポジウムの最後に発言された小林登理事長の言葉は「子どもは未来である」であった。子どもは我々の文化社会を担い、新たな文化を創生する存在である。その子どもたちが生きられる環境をつくらずして、日本の未来はない。

子どもも大人も生きることに精一杯だった時期を過ぎ、新たな課題に直面している今、子どもたちをどう支えたらよいか。子育ては地域社会と親の連携協働の営みである。家族の絆、地域の絆、そして日本中の人々の絆を結び直すことが課題である。

被災した人たちと共にいることを忘れずに、子どもたちが伸び伸びと育つ成育環境のデザインを本学会員たちで探究し、実践していきたい。